

オペラってな～に？ ①

昨年6月プチボワ主催で《モネ劇場・アトリエ見学ツアー》を開催し、お子様を含めた大勢のご参加で大好評だったため、今年も6月2日(日)に同ツアーを開催します。そこで、スタッフが「オペラとは？」という疑問にお答えする手引きを紹介します。見学ツアー前のご参考に、また日本よりも安価で身近な今後のオペラ鑑賞にお役立てください。

オペラは日本語で歌劇と訳されていますが、Operaはラテン語のOpus(作品の意味)の複数形です。初期にはDramma in musicaと呼ばれていたのが、Opera in musicaとなり、オペラと短縮して呼ばれるようになりました。オペラの誕生年は諸説ありますが、ほぼ1597年で発祥地はフィレンツェ。時代はルネサンス末期で、貴族や風流人たちが古代ギリシャの劇を復活して音楽劇で上演しようと試みたことが始まりです。一番最初のオペラは、詩人リヌッチーニ、作曲家ヤコポ・ペーリ、歌手カッチーニなどが共同で「ダフネ」を制作しましたが、この楽譜は一部しか現存せず、ほぼ同じメンバーで制作した第2作目「エウリディーチェ(Euridice)」(1600年)の楽譜が現存し、現在でも上演されます。その後オペラはイタリア中に広まり、特にヴェネツィアでは1607年にモンテヴェルディが劇的な音楽表現を加えた「オルフェオ」を作曲し、今日でもよく上演されています。

同じ時期の世界を見渡してみますと、日本では歌舞伎が誕生し(1603年)、50年遅れで中国の京劇が誕生しています。歌舞伎は芝居が中心、京劇は踊りが中心、そしてオペラは音楽が中心と考えられるでしょう。

さて、初期のオペラにおける特色は、誕生の地がイタリアであったことから言語がイタリア語であること、もう1つの特色は、女役はカストラート(男性去勢歌手：声変わりをする前に去勢手術をすると少年の声が一生続く)によって演

じられたことが挙げられます。京劇も中華人民共和国ができるまでは、全て男性によって演じられ(台湾の京劇は今でも男性のみ)、歌舞伎はご存じの通り男性だけです。オペラも初期のころは男性のみで演じられました。



また、オペラはよく総合舞台芸術だと言われますが、それは、音楽に加え、演劇(演出や演技)、文学(題材や歌詞)、美術(舞台装置や照明、衣装)、舞踏的要素といったさまざまな要素が合体されているからです。

オペラは誕生から400年の間、それぞれの国やその体制、聴衆の要求などから様々な変化が生まれて色々な種類となりました。次に、オペラ鑑賞時に役立ちそうな主な種類をご紹介します。

《オペラ・セリア》(厳粛なオペラ) 17～18世紀に一般的だったジャンルで、神話や歴史を題材にした古典オペラでモーツァルトの「イドメネオ」や、モンテヴェルディ作曲の「ウリッセの帰還」などがあります。このオペラ・セリアに対して、18世紀のイタリアの喜劇的オペラを《オペラ・ブッファ》(こっけいなオペラ)と呼び、これはその時代の世俗的な題材を取り上げたもので、有名なのはモーツァルトの「フィガロの結婚」やロッシーニ作曲の「セビリアの理髪師」などがあります。イタリア人オペラ作曲家ヴェルディ以降の19世紀末にイタリアで生まれた《ヴェリズモ・オペラ》は、下層階級の生々しい事件などを題材にしたもので、マスカーニ作曲の「カヴァレリア・ルスティカーナ」、レオンカヴァッロ作曲の「道化師」、プッチーニ作曲の「トスカ」など庶民に爆発的な人気がありました。ドイツで生まれた《ジングシュピール》(ドイツ語による歌芝居)は、音楽の合間に音楽のない台詞が挟まって劇を進行するものです。モーツァルトの「後宮からの誘拐」や「魔笛」、ウェーバーの「魔弾の射手」などが挙げられます。その他、ワーグナーの改革による《楽劇》があり、ワーグナーは「オペラは音楽が語るドラマだ」と考え、一幕が途切れないように作曲されています。



5月号に続きます。